

論文審査の要旨及び担当者

No.1

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	石川 初
論文審査担当者	主 査	政策・メディア研究科委員	兼環境情報学部教授	一ノ瀬 友博
	副 査	政策・メディア研究科委員長	環境情報学部教授	加藤 文俊
		政策・メディア研究科委員	兼環境情報学部教授	諏訪 正樹
		早稲田大学創造理工学部教授	後藤 春彦	
学力確認担当者：				
<p>石川初君の博士論文は、「ランドスケープ思考-思考法としての「ランドスケープ」の再定義-」と題したものである。ランドスケープは、英語の <i>landscape</i> をそのままカタカナ表記したものであるが、その訳語としては、これまで、風景、景観、造園といった用語が当てられてきた。古くはドイツ語の <i>Landschaft</i> を、ドイツに留学した植物生態学者、三好学が景観と訳した一般的に言われている（ただし、三好学は他の言葉を訳語として用いたという説もある）。その後、景観という言葉が、日本語として一般的になる一方で、ドイツ語の <i>Landschaft</i> や英語の <i>landscape</i> の訳語として、景観が本当に適当なのかという議論が長年繰り広げられてきた。景観という言葉は、造園学、生態学のみならず、都市計画学、土木学、建築学、歴史学など、幅広い分野で盛んに用いられるようになったが、どのような意味で使っているか表明しないと専門家であっても議論がかみ合わない。石川初君の論文は、この古典的でありながら依然として大きな課題となっているテーマに、新しい視点から切り込もうとする意欲的なものである。</p> <p>まず序章では、本論文が対象とするものを、「機能としてのランドスケープ・アーキテクチャ、特に建設に関わる現場における専門的知識の発現やデザインに関わる行為である」としている。なお、用語の整理については1章で扱っているので後述する。本論文は、ランドスケープ・アーキテクチャの「感性の部分」に注目し、それが実践においてランドスケープのデザインの行為や表現、それらに通底する態度に発現すると仮定し、取り出して記述している。それらはランドスケープをどのようにデザインするかのも動機とも言えるものであるが、それはランドスケープが実際にデザインされる際の根幹でありつつ、世界の事象を読み解き、何らかの提案を行なうための「考え方」として有用であるとしている。本論文ではこれを「ランドスケープ思考」と呼ぶ。「ランドスケープ思考」の論述は既に定型化された理論を演繹的に論証するものではなく、既往のランドスケープ・アーキテクチャ研究・言説を踏まえた上で、筆者の実務経験から帰納的に考察して仮説を提示するものである。この仮説を導く実務経験からの考察は回顧的・内省的なものである。多くのランドスケープ・アーキテクトに共通する特徴として記述することを目指すのが、その根拠として筆者の「一人称研究」の方法をとっている。</p> <p>本論文は、序章に続き、7章で構成されている。第1章では、本論文の前提として、近代的機能としての「ランドスケープ・アーキテクチャ」について、またそれが日本に受容された経緯と「造園」との関係について検討し、ランドスケープ・アーキテクチャが掲げる「ランドスケープ」を志向する対象であると見なすことで様々な建設系の専門分野を統合して考えることが可能であることを示した。そのうえで、造園/ランドスケープデザインの現場における筆者自身の作業を振り返りつつ、既往の言説を援用して、実践において発現するランドスケープ思考は「身体で地図を描く」「見立てを物語る」「仕掛けて育てる」という行為と「より広域へ」「肯定的に」「緩く」という態度の組</p>				

み合わせとして図示できると論じている。このような整理は、これまでに無い独創的なものである。

第2章から6章までは、筆者のフィールドワーク、実践に基づいたケーススタディで構成されている。第2章では、ランドスケープ思考の応用として、東日本大震災からの復興のランドスケープ計画において提唱された「生存のランドスケープ」という概念と、それを支える「移動」について論じた。復興のランドスケープでは、何よりも人が生存するという観点から新しい風景像が検討され、生存のランドスケープは咄嗟の避難行動や避難施設の整備といったスケールに留まらず、地域の共同体の再生、記憶の継承、千年単位の国土像の提示まで、時間的・空間的なスケールの広がりをもって構想されなければならない。また、震災に伴って首都圏で発生した帰宅困難者による徒歩帰宅行動の分析から、移動することによって、都市の内部と外部の境界の存在と、そこで行われている排除の施設化が顕在化することを論じた。また、移動することによって地形のように通常は認知できない広域的な事象を理解し、地図と実空間を結びつけて統合的に理解できることを示した。

第3章では、土木構造物と公園を取り上げ、制度が卓越することで日常的なスケールでは理不尽なあらわれ方をしている施設と如何に向き合うことができるかが論じられている。土木構造物については、ひとつは身体のスケールとの調停として、土木と身体の間には建築のスケールを挿入する手法がある。もうひとつは、「工場萌え」を始めとする都市基盤施設や生産施設を審美的に鑑賞するという方法である。後者は、土木や都市という枠組みに留まらず、自然と人工を超えた「風景」の獲得の可能性を示唆する。公園については、都市公園という典型的なデザインされたランドスケープとされている施設において、「ポケモン GO」などの位置情報を利用したオンラインゲームのフィールドという「理不尽」な利用に晒されることで、公園施設が本来の「理不尽さ」を呈することを示した。そして、都市公園のような強い制度ではなく、暫定利用の近隣公園のゆるさが本来の公園の精神を具現化している可能性が指摘されている。

第4章では、農地として長年利用されてきた古墳や、水田によって受け継がれてきた平城京の条坊遺跡の事例から、期せずしてその形態が継承された遺跡について、その上になされた人の営為の有り様について分析した。また、「造園」「園芸」「雑草」というカテゴリーを設けて観察することで、植物の生育という観点からは、都市は制度による配置、住民による栽培や装飾、自然現象という構造によって理解できることを示した。加えて、筆者の園芸の実践経験を通して、庭造りは園芸と造園と雑草の間を行き来するものであること、「雑草を許す園芸」や「園芸化する造園」「雑草化する造園」といった、その越境の「ゆるさ」が庭造りの継続に重要であることを論じた。

第5章では、伝統的農村集落とそれを取り巻く環境を「トータルランドスケープ」と捉え、そこに見られる持続的な住環境と物質循環を可能にするものとして「緩い分類／保留」という概念を提示した。「緩い分類／保留」は住環境に流入するモノに対する扱いの態度であり、より広域の社会・経済活動がもたらす物体・物質と、その土地の自然がもたらす物体・物質を等価に並列した。その操作が農家の周囲に見られる手作り農機具や生活用具などの創意工夫を促していることを示した。

第6章では、筆者の勤務する大学など（SFCを含む）において、ランドスケープの初級教育の実践の試みを紹介し、ランドスケープ思考をどのように教育に活かすのかその可能性を論じている。この教育は、筆者が唱える「ランドスケープ思考」の実践の

論文審査の要旨及び担当者

No.3

場の一つと捉えることができるが、本論文の中で一つの完成形を示せたというわけではなく、今後筆者が教育者としてその実装を試みる手がかりを得たという段階である。

第7章では、これまでに議論がまとめられている。本論文で示されたのは、ランドスケープ思考が造園／ランドスケープデザインの実践の現場において現出すること、それを支える特有の心情や態度があるということである。また、この思考によって様々な事象をランドスケープ的に読み解き、物語ることができるということ、そして様々な事象のなかに、ランドスケープ思考と呼べる思考が働いていることを見出すことができるということである。つまり、風景をランドスケープ思考のあらわれだと考えることができる。ランドスケープが思考であれば、どのようなものづくりやデザインもランドスケープであるとみなせる。ランドスケープ的建築やランドスケープ的土木、「ランドスケープ的造園」も考えられるのである。あるいはつくり手だけでなく鑑賞者にとっても、ランドスケープは開かれる。私たちは誰でもランドスケープ的に世界を眺め、ランドスケープ的に解釈し、思考することができる。ランドスケープ的に生活し、自らランドスケープとなることができる。いや、身体で地図を描き、見立てを物語り、仕掛けて育てるといった実践のうちに、私たちはランドスケープの当事者なのであると、筆者は説いている。

はじめに述べたように、「ランドスケープ」「景観」といった用語は、一般的になった一方で、その職能とあわせ、度々議論されてきたテーマである。そして、最後に筆者が述べているように、造園／ランドスケープデザインに固有な、建築や土木、都市計画などの隣接分野と異なる思考があることは、造園／ランドスケープデザインの内部では意識されていつつもいわば自明のこととしてあまり議論されていなかった部分であった。筆者は、長年ランドスケープ・アーキテクトとして実務をこなし、その後教育に関わるようになり、SFCに着任したことにより、教育研究に軸足を動かした。この筆者の経験があって初めて、思考法としてのランドスケープ、つまりランドスケープ思考にたどりついたと言える。それが一人称研究の手法で見事にまとめ上げられたと評価できる。

本論文は、研究だけ、あるいは実務だけではたどりつくことができなかつたものであり、さらには、SFCという様々な分野が融合し、かつ学生とともに課題発見解決を目指す場であったからこそまとめることができたと言えよう。本論文が提唱する「ランドスケープ思考」は、造園学をはじめとしたそれぞれの専門分野においても、極めてユニークな視点であり、学術的な新規性も高い。石川初君はSFCに着任して5年間、教育と研究、実践を精力的に進めてきており、政策・メディア研究科委員も務め、多数の修士課程の学生の主査・副査、そして博士課程学生の副査の実績もある。以上のような理由から学位審査委員会は、石川初君が論文博士（学術）にふさわしいと判断した。